

◆ 河畔林 ◆

我が国の「治水」の歴史は、古くは弥生時代の遺構の中にも見られますが、畿内においては古墳時代に、河内平野の開発とともに淀川・大和川や周辺の池において、排水路や堤防の築造等の治水事業が行われました。その後、時々の権力者や統治者によって事業は継続され、近世になって外国からの技術の導入によって「洪水流を河道内に押しとどめ一刻も早く海へ流下させる」目的で、河道掘削・直線化、築堤等に重きを置いて実施されました。その過程で洪水流を阻害するものとして、真っ先に河川内の樹木が伐採され、単調な川が出来上がり、棲息生物の多様性は失われていってしまいました。

川の中の樹木、水辺林や河畔林が果たす役割を考えると、鳥類や昆虫類の巣や餌場、休息場を提供し、大規模林になると、小動物の隠れ家ともなり、多くの生き物を育む重要な環境となります。特徴的な事例では、猛禽類のハイタカやチョウゲンボウは、樹木の枝にとまって休息したり、餌となる小動物を狙う場所として利用しています。つまり、河畔林は河川生態系の頂点である彼らをも育む事のできる貴重な存在なのです。物理面では、日光を遮ることにより地表面の温度上昇を抑制し、根を張る事により土壌の流出を防ぐ効果もあります。

数年前まで、ある淀川河川公園の樹木をフクロウの仲間のトラフズクが越冬の場所として利用しており、愛鳥家の目を楽しませていましたが、何らかの理由でその木が伐採された後は、その姿を見ることも無くなってしまいました。もちろん、そのことだけのために治水面をおろそかにするものではありませんが、自然豊かな河川景観としても人々が河川散策の際にちょっと休憩する日陰を提供する場所としての価値にも着目する必要があるのではないのでしょうか。



●チョウゲンボウのカップル



●ハイタカ属

環境省 環境カウンセラー
NPO法人 nature works
池田 哲哉

水辺の博物誌



ゲラといっても、笑い上戸にあらず。

アオゲラ *Picus awokera*

国内で見られるキツツキです。北日本では比較的によく見かける野鳥ですが、季節移動をしないので、淀川水系でも少数ですが里山の林などで観察できます。当然、キツツキの仲間なので生木の幹に穴を掘って巣を作り、雌雄交代で抱卵します。小柄で体色の地味なコゲラとは違って羽色が美しく、オスの頬は赤色が目立ちます。ちなみに、アオゲラやコゲラのゲラとは、寺社などの古い木造建築物をつつく習性から「テラツツキ」という呼び名が「ケラツツキ」と変化し、その省略形である「ゲラ」を濁音呼びすることから「〇〇ゲラ」となつたと云われています。ゲラといっても、けっして笑い上戸ではないのでですね。(画/森本宏美)



来た・見た・聞いた 淀川雑記帳



仲間が天瀬ダムでチャンネルキャットフィッシュを釣ってきた。その場で頭を落として移動。冷凍状態で私の家にやってきた。岐阜では「河ふぐ」とし称して名物料理になっている。ナマズの仲間なのだから、さぞかし美味いだろう。

というわけで、立田揚げにしてみた。身は白く、肉がしまっている。淡白で上品な味。アメリカではフライをハンバーガーにするのが有名だ。淀川水系でも増え続けている特定外来生物。バスやギルのように食べて、食育につなげるのもいいかもしれない。(編集長・石山郁慧)



多種多様、淡水魚たちの生態と生活史 淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

モツゴ

Pseudorasbora parva

コイ目コイ科モツゴ属の最もポピュラーな魚です。分布は、もともとは関東地方以西の本州・四国・九州で、国外では東アジア地域から知られています。近年、他魚の放流による混入によって、本来生息していない北海道や東北地方、沖縄県にも分布を広げています。湖や池沼、河川下流域、用水路など流れが緩やかなところに広く生息し、水質汚濁や環境変化への適応力が高く、汚れた水域や三面コンクリート護岸された水路などでも生息しています。



クチボソという別名通り、口が小さい。

全長は8cmほどに達し、成熟した雄以外は、体側に1本の明瞭な黒色ラインが入るのが特徴です。繁殖期は4月から8月で、石やコンクリートなどの表面に卵を産み、オスは孵化するまで保護します。



食性は、付着藻類や底生の水生昆虫などの小動物を好む雑食性で、寿命は3~5年ほどです。近縁の在来種で絶滅危惧種として知られている濃尾平野に生息するウシモツゴや東北地方に生息するシナイモツゴと交雑し、雑種化した集団に置き換わる現象が各地で起こり、純系種の保存に大きく影響しています。また一方で近年、ブラックバスやブルーギルが移入された水域では、食害により著しく本種の個体数が減少し、絶滅危惧種や準絶滅危惧種などに指定されている地域もあります。小型の魚で、丈夫で飼いやすい魚なので、ぜひ飼育にチャレンジしてみてください。

under the water

花想鳥感

四季折々、
水辺の生物多様性

高槻市立自然博物館 主任学芸員
高田 みちよ

カヤネズミ

日本で一番小さなネズミが淀川や農耕地の草地にいてくご存じですか？体重わずか7~8g、頭胴長（鼻先から尾の付け根まで）約6cm。人の親指ぐらいの小さな小さなネズミです。ネズミといっても台所に侵入して食べ物をあさったりはしません。茅場（カヤバ）と呼ばれるイネ科の草を取るための草地を主な棲みかとしています。しかし、近年では草が人の生活に不要になり、カヤネズミの生活の場は開発されたり放置されたりして失われてきました。今ではその姿を見ることは難しいですが、草地につくられた巣は体のわりに大きく目立つので、比較的に見つけやすいものです。カヤネズミは淀川ではヨシやオギなどの茎に、葉を編みこんだソフトボールぐらいのサイズの丸い巣をつくります。鳥の巣と違って真ん丸で天井もある巣で、斜め下側に出入口がいています。巣は初夏から秋につくられます。巣は家ではなく、子どもを育てるゆりかごです。巣の中には子どもたちがいます。母親はいつでも巣にいるのではなく、定期的に巣に立ち寄り、子どもに乳を与えます。子どもたちは大きくなると巣からはなれます。体の小さな生きものなので高カロリーな食べ物を必要とし、昆虫を多く食べる他、草の実などを食べてくまっています。カヤネズミは大阪府では準絶滅危惧種に指定されています。彼らの姿や巣を見かけたら、触らずにそっとしておいてやってください。



◆写真提供（上）/早川 篤



the waterside

the sky & land

水辺の

虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

環境省 環境カウンセラー 川島 大助

テナガエビの仲間

カワエビとも呼ばれ食用にもなる手長海老。名前のとおり手が長いのが特徴です。長いハサミがある手を第2歩脚と呼び、第1歩脚が大きいザリガニとは、実は長い脚の部位が異なります。成体の体長は10cm程度でハサミはオスの方が大きくなります。体色は緑褐色~灰褐色ですが、若齢個体ほど半透明で黒いしま模様があり、スジエビに似ています。しかし、額角上縁の歯の数はスジエビよりテナガエビが多いことで見分けることができます。本種は海（汽水域含む）と川を行き来する回遊性で、淀川では河口~三川合流、さらに上流の宇治川、木津川、桂川、その他、支流等の広範囲に分布。琵琶湖等の湖沼を海の代わりに利用する陸封型もいます。産卵は夏がピークで、メスは産卵後、腹脚で孵化するまで保護します。孵化した幼生（ゾエア幼生）は、川の流れて流下し、海へ下り1ヶ月ほどで稚エビになり、再び河川遡上して淡水生活になります。夜行性で、昼間は石の下や植生帯の空隙に潜み、夜になると活動し、水生昆虫や魚の死骸などの有機物を捕食します。



左下はテナガエビ、右下はスジエビ。額角の違いで見分けられる。



テナガエビがいる川は、川と海（陸封型の場合は湖と川）の連続性、水生生物の生息場となる石下の空隙、植生帯の隠れ家があることを判断する指標にもなります。昼間は夕毛網でガサガサして捕獲、夜は水際を照らすと、眼が赤く反射するテナガエビを見ることができますよ！

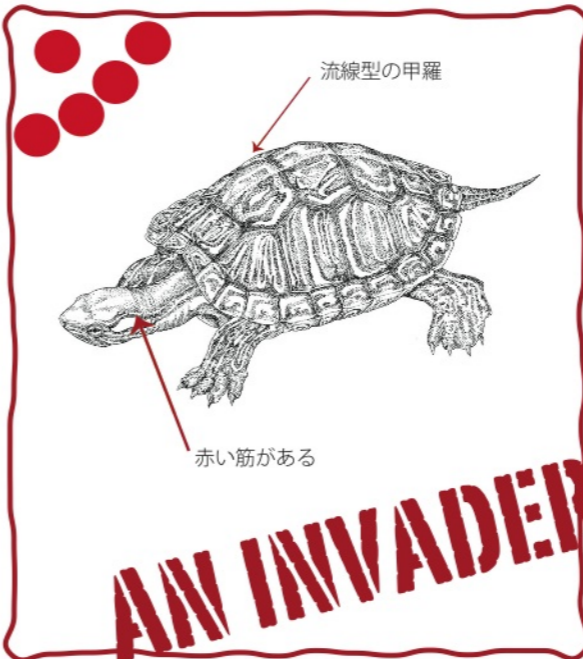
the worst 100

侵略的外来生物

淀川ワースト100

ヌマガメ科 ミシシippアカミミガメ
Trachemys scripta elegans

淀川管内河川レンジャー 石山 郁慧



原産は米国南西部。メスの最大甲長は28cm。甲羅は平らな流線型で、四肢の水かきが発達しており、泳ぎがうまい。体や顔に黒と黄色の縞模様があり、耳の辺りに赤い筋がある。子ガメの頃は真ん丸で、黄緑色をしていることから「ミドリガメ」と呼ばれている。1955年頃からペットとして子ガメが輸入され、今や日本の自然環境で一番多く生息する種となってしまった。環境省では「生態系被害防止外来種リスト」において緊急対策外来種に位置づけられ、自然的、社会的状況から対策が困難であった本種の対策を推進するため、平成27年7月に「アカミミガメ対策推進プロジェクト」を公表した。終生飼養を進め、捨てガメをゼロにすることを目標とする。



（上）子ガメの通称はミドリガメ。丸くてきれいな姿をしている。
（下）静岡大学の戸田先生から譲り受けた甲羅楽器。ポコポコと面白い音を奏でる。

